

# 琉球大学学術リポジトリ

ジークムントの悪徳：ゲラートの感動喜劇『優しい姉妹』の喜劇性に関連して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 満寿男, Kataoka, Masuo, 片岡, 満寿男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002004161">https://doi.org/10.24564/0002004161</a>

ジークムントの悪徳  
ゲラートの感動喜劇『優しい姉妹』の喜劇性に関連して

片岡満壽男

1

感動喜劇 *rührendes Lustspiel/Rührkomödie* は喜劇なのかとは、なかなか難しい問いである。涙を流して何が喜劇かと訊かれれば、ドイツ文学者としては、そこには笑いも有って矢張り喜劇ですよ、感動もある趣深い喜劇ですよと答えなければならぬのかもしれない。その感動喜劇はというと、笑いをせせと切り詰めようとする。これ恰も喜劇でなくなろうと一生懸命であるとさえ見える。

笑いを切り詰めようという傾向は既にゴットシェートの文芸理論に見られた。彼の理論及び翻訳導入された喜劇の実例に倣ったものをザクセン類型喜劇 *sächsische Typenkomödie* と称するが、その主だったところはまた風刺的喜劇 *satirische Komödie* とも呼ばれている。教訓をもたらさない様な笑いを喜劇に求めてはいけなくなったのである。笑う為だけの喜劇は、啓蒙人士の見る可きものではないという訳である。

類型喜劇の場合にはそれでもまだ笑いを楽しもうという所があるが、これがセンチメンタリズムの催涙喜劇となると、如何に泣かせるか、如何に観客の涙を絞るかという所に重点が移っていく。一般に演劇では、主従の間で、夫婦の間で、或いは親子で、或いは友人同士で、ほろりとさせる見せ場があるものだが、それは筋の流れとは必ずしも関係無いものもある。ところが感動喜劇ではこうした事が自己目的化してしまうと言って良いだろう。それは「徳の試練」 *Tugendprüfung* (Steinmetz 54) という形を取り、とりわけ恋人同士とか友人同士が、つまり愛と友情が、自分を犠牲に出来るかどうかを試される事になる。狙う所は観客の感動である。友人を、恋人を、これでもかこれでもかと自

己を犠牲にせざるを得ないところに追い込んで、観客の涙を絞ろうというのである。こうして喜劇的な要素は排除されていく。ゲラートはドイツでの感動喜劇の創始者にして完成者であるが、彼の三幕物の初めの作品にはまだ笑いが残っているものの、『優しい姉妹』になると笑いは片隅に追い遣られてしまう。

本稿ではゲラートの感動喜劇『優しい姉妹』（“Die zärtlichen Schwestern” 1747）で、「徳の試練」に耐えられず、背信を咎められて愛と友情のサークルから締め出される羽目になったジークムントに注目し、彼の「悪徳」Lasterが笑って済ませられる程の事ではなかったかと弁護の方途を模索しながら、如何にこの作品から笑いが追い払われているかを示す事が出来ればと思う。

## 2

ゲラートの感動喜劇は1730年代のフランスの催涙喜劇 *comédie larmoyante* の影響を受けたものである。このドイツ語訳には *weinerliche Kömodie* もあったが、ゲラートは感動喜劇 *Rührkomödie* / *rührendes Lustspiel* という呼び方をしている。ドイツではザクセン類型喜劇に次第に時代病ともいべきセンチメンタリズム *Empfindsamkeit* が浸透して、それにつれて笑いが涙に取って代われ、ゲラートに至って感動喜劇という独特なものになったのだった。『優しい姉妹』はゲラートの三幕喜劇の最後にあたるもので、もはや類型喜劇とか風刺喜劇とは言えないが、その土台には類型喜劇の型が残っている。『優しい姉妹』には大筋が二つあり、類型喜劇の筋が初めにあって、それが感動喜劇の筋に取って代わられる事になる。

類型喜劇の筋の方から見ていくと、悪徳の主人公が理性的な周りの人々と対立し、そこに批判風刺の余地が生じ、笑いも生まれる。こうした悪徳の主人公にあたるのが『優しい姉妹』ではユールヒェンで、婚約の日に相手の男性の求愛に対して、当分束縛されたくないと自由を主張する。美人の我儘娘である。彼女の誤った行動や考え方は正されなくてはならない。愛に目覚めなくてはならない。このユールヒェンにまつわる話の筋は、詭計あるいはトリックとともに進行する。彼女の心を動揺させようというものである。姉のロットヒェンは、自分への結婚申込者ジークムントと、妹への結婚申込者ゲーミスとに提案する。

それは、妹ユールヒェンに対してジークムントが気がある様に振る舞い、ダーミスは気がなくなった様に振る舞うという約束となる。戯曲によくある詭計 List／Intrigue である。更には遺産話が絡んで相続人指定の報せに間違いがあったりするので、すっかり喜劇仕立てである。

姉妹の家庭は余り裕福ではないらしく、父クレオーンは持参金を付けてあげられないのを嘆いている。二人の姉妹の交際相手はそれぞれこれを承知で結婚申込をしようとしている。この徳性の高さが観客を感動に誘う。筋は差し当たり喜劇だが、随所に泣かせ所が作られている。

さてここに、叔母にあたる人が遺言したという遺産の話が飛び込んでくる。持参金が無いだけ、この遺産の行方は大きな意味を持つ。というのは姉のロットヒェンの場合、相手のジークムントがその後財産を失ってしまい、仮に婚約しても、結婚は暫く出来そうにない状態である。ロットヒェンはそれでも相手を変えない、10年でも待つと言うが、これも泣かせ所である。遺産の話は、相続人が誰かということである。先ずは遺言について間違った報せが口頭で為され、それによれば相続人は父クレオーンでもなく、姉のロットヒェンでもなく、妹のユールヒェンだというのである。それに従って人々の思惑に、行動に、動きが出る。そのあと書面に基づいて、相続人は実は姉のロットヒェンだと訂正される。こうした取り違えは、人間の本性を暴露する手立てとして、喜劇の好んで用いる所である。

相続人の取り違えは、『優しい姉妹』では「徳の試練」に使われる。試練を乗り越えられなかった者は笑われるのではなく、周りに糾弾されるばかりで赦してなどもらえない。ジークムントは今日にも婚約という当日、ロットヒェンという存在がありながら妹のユールヒェンに乗り換えようと画策することになる。目当てはもちろん遺産である。先ずはユールヒェンが相続人との報せを聞かされたからである。

遺産は騎士領で時価50 000ターラー以上という。ユールヒェンへの結婚申込者のダーミスは現金で50 000ターラー持っているという。するとこの50 000ターラーという金額は、裕福な家庭の財産のひとつの目安として提出されているようである。その50 000ターラーがジークムントには無い。それどころか彼には

借金さえもあるようで。かくしてジークムントは思い悩む。50 000ターラーの入る妹のユールヒェン。すると彼女の別嬪振りが今更の様に彼の脳裏に蘇る。そして、

(Siegmond allein:) Aber habe ich weniger Vorzüge als Damis? Julchen widersteht ja seiner Liebe ... Ist es ein Verbrechen? ... Was kann ich dafür, daß sie mich rührt? Sind meine Wünsche verdammlich, wenn sie mit Julchens Wünschen vielleicht gar übereinstimmen?  
(ジークムント、独白:) しかしダーミスに較べて私に取り柄が少ないという事はなかろう。ほんとにユールヒェンは彼の愛を受け入れないではないか … そう考えるのは罪だろうか … 彼女が私の心を動かしたということ、どうしてそのことに私は責任が有ろうか … 私の望みも罰当たりなものだ、それがユールヒェンの望みとぴったり一致する事にもなれば。 (II/10)

この後ユールヒェンが現れる。ジークムントはロットヒェンの詭計では、ユールヒェンに気があるという、あくまで仮初めの役を演ずる事になっていたが、本気でこれを実行する。こうして『優しい姉妹』は何時の間にかジークムントの画策の話に、そしてそれを糾弾するという話になって行く。

『優しい姉妹』レクラム版の編者シュタインメッツはその後記で、この喜劇が初めは類型喜劇の筋をユールヒェンの筋とし、それが別の筋、ジークムント中心の筋にとって代わられると論じている (Nachwort 153/154)。初めの類型喜劇の筋、即ちユールヒェンの筋は、ユールヒェンの我儘を抑えて二組の婚約カップルの誕生というハッピー・エンドに向かう様であったが、遺産相続の話からおかしくなり、今や悪徳の主人公はジークムント、彼を中心に話は展開する。しかもジークムントは何度か独白を受け持つ。彼の悩み苦しむ姿はまるで悲劇の主人公の様である (中村 124)。独白は他の登場人物ではユールヒェン (I/7)、ロットヒェン (III/15) にそれぞれ一度しかない。

悪徳が笑いになれば喜劇である。その為には悪徳をこけにする人物がいれば

便利である。ユールヒェンの筋でマギスターは笑いの鍵を握っている。婚約の日に、まだまだ縛られたくないと言うユールヒェンは、自分の心の真実に気が付かない。それが過ちと看做されている。その過ちを矯正すべくユールヒェンの類型喜劇の筋はロットヒェンの詭計とともに進行するが、その傍らにマギスターが居るのである。彼は詭計を用いるのではなく、正面から説得を試みるが、的外れである。学識を振り回して大仰にすればする程笑いは大きくなる。ユールヒェンを、彼女の自由でいたいという考えを、どれだけこげにするかは、彼の口先に、身振りにかかっている。

マギスターはユールヒェンの筋があつてのマギスターである。だから筋がユールヒェンの類型喜劇の筋からジークムントの筋に変わってしまうと、マギスターの影は薄くなり、何だか変な奴が居るなあという印象しか残さない。

### 3

ジークムントの筋には悪徳はあるが笑いが無い。悪徳を笑い、傍らそれを是正するという類型喜劇の風刺は最早無い。とはいえ『優しい姉妹』は基本的に喜劇仕立てなので、ユールヒェンの筋でマギスターが笑いのキー・パーソンだったように、それに相当する登場人物をジークムントの筋の方にも捜して捜せなくもなさそうである。

ジークムントはクレオンの姉妹ロットヒェンと婚約の運びであったが、遺産の騎士領の相続人がロットヒェンではなく、妹のユールヒェンだと聞かされて愕然としたのだった。すると愛があるということで婚約したとしても、結婚はお預けになってしまう。かくしてユールヒェンに乗り換える画策が始まったのだったが、父親のクレオンに対しても働き掛けることになる。第二幕第16場の事である。小手調べとしてジークムントが「2, 3百ターラー借金が有るんですが…」と言うと、クレオンは「いいんだよ。ユールヒェンが貴方の借金を彼女の相続したものから支払う事になろうし、また貴方の結婚の始まりに1000ターラーよこしてくれる事になりますよ」。しかしジークムントはこれでは満足しないようで。何しろユールヒェン本人をものにすれば、騎士領の遺産50000ターラー以上と思ひ込んでいる段階である、

(Siegmund:) Darf ich Ihnen wohl sagen, daß mir Julchen nur itzt noch befohlen hat, bei Ihnen um sie anzuhalten und ...

(ジークムント:) 敢えて申し上げて宜しいかと思いますが、ユールヒェンは只今にでも、貴方に彼女との結婚をお願いするようにと、私に命じ兼ねなかったのですよ ... (II/16)

少しやり過ぎである。ロットヒェンの詭計で、ユールヒェンに気がある振りをする役目を仰せつかっていたにせよ、そこから遙かに逸脱している。更に、

(Siegmund:) Wenn Lottchen den Herrn Damis freiwillig wählen sollte: so bin ich viel zu redlich, als daß ich ihr einen Mann mit so großem Vermögen entziehen will.

(ジークムント:) 万一ロットヒェンがダームス氏を自ら進んで選ぶことになったとしましょう。その彼女からあんなにも大きな資産を持っている男性を取り上げてしまうには、私は余りにも誠実であり過ぎるんです。 (II/16)

これは一理ある話である。ロットヒェンが、ジークムントにお金が出る迄結婚がお預けとなれば、父親としては心配だろう。クレオン父さん打てば響く。なかなかちゃっかり父さんで、

(Cleon:) Sie sind die Großmut selbst. Ich kann alles zufrieden sein. Ich wollte Ihnen Julchens Vermögen ebensowohl gönnen als dem Herrn Damis. Freilich wäre die Einteilung nicht uneben. Lottchen wäre durch Herrn Damis' Vermögen und Ihnen durch Julchens Erbschaft geholfen.

(クレオン:) 貴方はまさに寛大そのものですなあ。万事に私は満足出来ますよ。貴方にはユールヒェンの財産をダームス氏と全く同様にお上げしたいものだよね。勿論配分は不平等にならないでしょう。ロット

ヒュンはダーミス氏の財産で、貴方はユールヒュンの財産で援助して貰うという事でしたら。 (II/16)

といい調子である。これは、財産の無い自分を遺産の入るユールヒュンに組合せ、財産のあるダーミスに遺産の入らないロットヒュンを組み合わせるというジークムントの考えに、ある意味では一致する所がある。

それでジークムントはいよいよ本題に入る。「ユールヒュンをお約束して下さいませんか？」しかし、これには優しいクレオン父さんびびってしまう。組合せを変えるところまでは出来兼ねるらしい。ロットヒュンの事を忘れちゃいけないよと言って、この話はお終いになる。

ジークムントの口車には乗らなかったものの、クレオンの彼への対応はなかなか面白味がある。滑稽味があると言ったら言い過ぎになるだろうか。要はジークムントの悪徳を肴にして、クレオンとのお笑いのコンビをお膳立てしようという作者の姿勢があれば良いのであるが。

しかしこの後、第三幕第7場で匿名の手紙がジークムントを「詐欺師」Betrügerだと暴露し、人々は憤り、やがてジークムントは糾弾されるに至る。そして土壇場を控えた第三幕第19場、ジークムントの居合わせる処でロットヒュンがクレオンに、ジークムントがユールヒュンを嫁に呉れと言ったのかを質す。すると父さん、

(Cleon:) So halb und halb hat er's wohl getan. Er mochte etwan denken, daß Herr Damis ein Auge auf dich geworfen hätte und daß dir's lieber sein würde, einen Mann mit vielem Gelde zu nehmen. Ich war anfangs etwas unwillig auf ihn; aber er hat mich schon wieder gutgemacht. Man kann sich ja wohl übereilen, wenn man nur wieder zu sich selber kömmt.

(クレオン:) まあ半ばそんな事を仰有ったんでしょなあ。彼はおおよそ、ダーミスさんがお前に気が有ったという風にお考えの様だったし、するとむしろ沢山お金の有る人を夫にする方がお前の為だろうと、お



考えの様だった。私は初めは少し彼の事で腹を立てたんだが、彼は直ぐにまた元の気持ちにして呉れた。人間得てして早まる事もあるだろうが、但しまた我に返りさえすればいいのさ。 (III/19)

“halb und halb”とは「まあ半ばそんな事だったかもしれんさ」「そうだな嫁に呉れと言っただろうとも、そうでなかっただろうともいうところだなあ」となるか。まあ話としてはそんな事もあったが、大目に見られる範囲だよという響きが有る。クレーオンは初めは腹を立てたが、その後は、人間得てしてそんな事が有り勝ちと気を取り直した様である。

ここでロットヒェンが人間そんなものとの現実を悟って、いわば大人に成って、糾弾の声もかまびすしい愛と友情の若者たちの機先を制して、私やっぱり彼にしておくわというようなことでも洩らせれば、万事はれ目出度し目出度し。ところがゲラートは、人間が現実にそうである様な性(さが)をではなく、心の誠実さを求めていた。だから、ロットヒェンはジークムントを糾弾する側に応じた答えを出す、

(Lottchen:) Unwürdiger! Mein Vermögen kann ich Ihnen schenken;  
aber nicht mein Herz.

(ロットヒェン:) 面汚しな方。私の財産は贈与する事は出来ます。だけど心まで贈与は出来ません。 (III/20)

まさしくセンチメンタリズム Empfindsamkeit, 金じゃないよ心だよと啖呵を切ったようなものだが、これで取りなし半分の、クレーオンの先の言葉は掻き消されてしまう。ジークムントの悪徳を肴に笑わせてやろうなどは、作者は考えてもいない。笑いは若者たちの純粋さを薄汚れたものにしてしまうのだ。

クレーオンの人物について第一幕第1場の娘ロットヒェンとの会話に戻って見てみよう。それは明らかにセンチメンタリズムの人々の会話であった (Späth 58)。すると父娘二人は、クレーオンも、有徳の人として、喜劇的な笑いとは本来遙かに縁遠い高尚な人物なのである。シュペートによると、クレーオンと

ロットヒュンの父娘は、啓蒙された男性が女性に対して教育者として父親の役割を受け持つような関係と看做している。心理学的な汎性説が援用されない限りは、この関係はなかなか高尚な関係に映る。作者ゲラート自ら、啓蒙されて小綺麗な文化生活をエンジョイしたいという女性方の教師を以て任じていた由聊かなりとも案ずれば、父クレオンも「優しい父」として、あるべきタイプの父親として設定されていると見るのが妥当な所である。するとクレオンは、確かにジークムントには優し過ぎる所もあるが、しかしジークムントの弱点を観客の笑いに供する相棒としては、ゲラートの考えもしなかった事であろう。勿論喜劇を意識しているから、台詞に矛盾を衝く可笑しみをやんわりと折り込んだり、物の分かった様な事を言わせてはらはらさせたり、この点ゲラートはなかなか喜劇作家なのであるが。

#### 4

喜劇の悪役、悪行悪癖の人は笑われる役である。とりわけ悪癖が嵩じて大袈裟などじを踏む。その大袈裟などじ故に彼は人気者である。そしてそれを取り繕って貰う頃には観客はお腹の皮が攀れそうになっている。ゲラートの三幕喜劇の最初の作品『信心ぶる女』では、各ん坊婆さんが主人公としてどっかと座っている。少なくとも一見した所そうである。観客は彼女が次にはどんなえげつないことを言うのかと、どんなとんでもない逸話が飛び出して来るのかと、要するにどんな滑稽な話で笑わせて貰えるのかと待ち構える。つまりまだまだ類型喜劇の性格類型がしっかり残っているのである。

『優しい姉妹』になるとこうした典型的な喜劇的人物は最早出て来ない。『優しい姉妹』には確かに悪徳の人となるジークムントは居る。しかし彼は初めからの、つまり型通りの悪徳悪行悪癖の人だったのではない。彼は徳の構えに何とか浴おうとする。そもそも劇中の登場人物は皆、有徳であろうとする構えを崩さない。ジークムントだけが徳の試練に敗れて、背信の意図を抱いて画策する。しかし有徳者の構えだけは最後まで崩さない。そんな不自然に硬直した姿勢で、ジークムントはどじを踏む。そこには何がしか可笑しみがある筈である。しかもこれは人間が本来持っている弱点のようである。すると劇中の他

の有徳の人々は皆偽善者ではないかという気持ちもむずむずするだろう。そんな風な劇作上の取扱いをするなら、観客の気持ちの綻ぐれる笑いも出て来よう。財産相続。ドッペル・リーベ。そんな事でどじを踏むなど日常大いに有りそうである。即ち有りそうということ *Wahrscheinlichkeit* については、ゲラートもその大切さを強調していたのだった。それにしても幾ら有りそうなこととはいえ、いやまさに有りそうなことだからこそ有徳の人々の目の仇にされる。それがいけないとの糾弾に次ぐ糾弾。そして最後に、金じゃないよ心だよとばかり啖呵を切られれば、感動せねばならない様に強いられる。笑いは不徳の致す所となる。

ゲラートは喜劇的人物無しでも、笑いが無くても、喜劇が可能だと考えていたらしい。これについては、彼の喜劇論『感動喜劇擁護論』“*Abhandlung für das rührende Lustspiel*” (Gellert “*Pro comoedia commovente*” 1751 のレッシングによる独訳)を見ておくのが良いだろう。ゲラートは喜劇は今や新しい時代に応じたものでなければならぬとし、感動喜劇 *Rührkomödie* がその様なものであるとし、これをアリストファネス、プラウトゥス、テレンティウス以来の古い喜劇から区別した。伝統的な喜劇はどちらかといえばお笑いの方に主眼があり、それはそれで良かった。しかし今、喜劇も新しい時代に応じた新しいジャンルがあって良く、その為に古来の喜劇の定義がより拡大される可きではないのかと提案する。

笑いを切り詰めようとする傾向は既にゴットシェートの文芸理論に見られた。よく言及される所では、彼の演劇改革でアルレッキーノとかハンスヴルストとかの笑いがお呼びでなくなった事である。その理由の凡その所はというと——滑稽な事は沢山有るが、だからといって滑稽な事が必ずしも背德的であるとは限らない、というものである (Steinmetz 22; Gottsched 348)。そして背德的なものであれば、それを見て笑う事で、観客は何が可笑しいかに気付き、何が正される可きかを知ることが出来るというのである。これは風刺の発想であって、それゆえゴットシェートらによるザクセン類型喜劇は風刺的喜劇 *satirische Komödie* とも呼ばれている。教訓をもたらさない様な笑いを喜劇に求めてはいけなくなったのである。

ゲラートの『感動喜劇擁護論』では新しい喜劇のジャンルを感動喜劇と呼んでいるが、そこにはゲラート独自の感動喜劇、『優しい姉妹』のような感動喜劇だけでなく、むしろザクセン類型喜劇全体を想定しているらしい。そして類型喜劇の笑いを大筋では是認しながら、出来れば笑いは静かなものにしてこうと考えていた。但し、静かな笑いがそもそも笑いと言えるのかと敢えて問うても、何かすっきりしないのであるが。

「爆発的な激しい嬉しさは…より真面目な心情の感動を容れるのが容易ではない。それでもより静かな嬉しさの方ならそのより真面目な心情の感動を許容してくれるものと思う。更に、嬉しさが喜びであるのは、それが庶民生活の模倣の際に感じられる所の喜びなのであって、もしその嬉しさという喜びが唯一の喜びという訳ではないとすれば——そうだとすると、嬉しさ以外に、一種の心情の感動を引き起こす事の出来る内容を選んでいる喜劇、それがどの点で非難されるべきなのか、そういう事があれば言って欲しいものである。ここで一種の心情の感動というのは、悲しさの見かけを伴っているが、しかし本来は並外れて甘いのである」(Abhandlung 119; 原文は註を参照のこと)¹。

「嬉しさ」Freudeを以てゲラートは笑いと理解しているらしい。その笑いには爆発的な激しい笑いとは静かな笑いとがあって、爆発的な激しい笑いは伝統的な喜劇によく見られるものであり、静かな笑いの喜劇はゲラートがこれに注目して新しい喜劇の為に理論化しようというものである。だから彼は笑いの嬉しさだけを「喜び」Vergnügenとするのではなく、別の「喜び」に話を転じる。というのは現代の喜劇が狙うのは笑いではなくて、「心情の感動」という「喜び」なのだという持論だからである。

ゲラートが現代の喜劇として念頭に置いているのは感動喜劇であり、それは催涙喜劇と呼ばれもしたように観客の涙を絞ろうというものである。そして涙また涙でどうして喜劇かというような批判に晒されていたのであった。さて引用の「甘い」「心情の感動」とは何だろう。「一種の心情の感動というのは、悲しみを見かけを伴っているが、しかし本来並外れて甘いのである」。これは、涙を流してどうして喜劇なのかという問いに対する一つの答えではないだろうか。「甘い」「心情の感動」とは引用のテキストをよく読んでみれば「喜び」

Vergnüen の事である。すると感動喜劇とは一見したところ涙ゆえに悲しみの劇の様であるが、「甘い」「心情の感動」という「喜び」のある劇だと、或いはそうある可きだとして、これをゲラートは喜劇であるとするためにためらいは無いようである。

声高な笑いとなる可笑しさに対して、可笑しさには「もう一つの種類」があり、それは「より繊細にしてより控え目であり、というのはそれは（声高な笑いの可笑しさ）同様に喝采と喜びを目覚ませるが、但しその喝采と喜びとは必ず次の様なものに限られる。それは強力に爆発して飛び出してくる様なものではなく、言わば心の内奥に錠を掛けて閉じ込められた儘になっているものに限られるのである」（Abhandlung 118/119; 原文は註を参照のこと）<sup>2</sup>。

感動喜劇の笑い、即ち静かな笑いに該当するのが「甘い感動」という心の内奥にしまい込まれた「喝采」Beifall であり「喜び」Vergnüen なのである。嬉しさを面てに出さない、こらえた笑いである。

「静かな嬉しさ」、あるいはこらえた笑いとは、それが実際にはどんなものなのかを『優しい姉妹』に見てみよう。ロットヒェンの涙で終わる結末は一見悲劇的かと見えるのであるが、作者ゲラートはそれをそうは考えていなかった様である。ロットヒェンは涙を流して泣いているが、それは結婚話が上手く行かなかったからである。しかしもし上手く行ったにせよ、結婚というのは外面的な幸福である。そしてジークムントの様な男との結婚は内面的には不幸である。するとロットヒェンは外面的な幸福を逃す事によって、内面的な不幸を回避出来たという事になる。すると本当はロットヒェンは喜ぶ可きである。あるいはそうしたロットヒェンの事を周りは喜んで上げられる、少なくともジークムントとダーミスは喜んでいいる。ユールヒェンにもよくぞ諦めて呉れたとの喜びが有る。勿論ユールヒェンの場合妹として、また同じ様に婚約に漕ぎ着ける事を楽しみにしていた者として、悲しみへの同情も多かるうけれども。こうして見ると作者は、結婚話が上手く行かなかった結末を、良かった良かったと喜んで欲しい様である。つまり観客にも心の内奥の「喝采」があり「喜び」が有る筈だと考えているらしい。そしてロットヒェンの気持ちの解釈としては、矢張り「心の内奥」では喜んでいいるのではないかとの推量が可能だろう。そして

ゲラートという人はちゃんとおまけを用意しておく。大抵はお金であるが、今回は男である。ロットヒェンにはもう婚約予定者の後釜ジーモンがちゃっかり確保されているのである。これはこの戯曲が実はハッピー・エンドなんですよという作者の気持ちのしるしである。

5

『優しい姉妹』には複数の筋があり、感動喜劇でなければ考えられない展開、一見した所では不幸な結末となるのがジークムントの筋である。ジークムントの筋には悪徳は有るが笑いは無い。これを検討してみよう。

悪徳には色々あろうが、第三幕第12場で学者マギスターの挙げる所によれば、ジークムントは「食欲」geizigであり、それは「利己」Eigennutzである。そしてロットヒェンに「背信的」untreuである。マギスターは彼を「詐欺師」Betrüger、「裏切者」Verräter、「嘘つき」Lügner、「誹謗者」Verleumder呼ばわりする。

センチメンタリズム Empfindsamkeit の徳には利己的ではない事、そして誠実である事などがある。徳目としては「誠実さ」Aufrichtigkeitと「節操」Treueが脚光を浴びる。そして利己的 eigennützig ではないこと等についてひと纏めに「没我」Selbstlosigkeitとはピクリークの論ずる所である。「没我」はセンチメンタリズムの究極である。そして『優しい姉妹』で、ロットヒェンが初め遺産の相続人が姉の自分ではなく妹のユールヒェンであると告げられた際に、妹が喜ぶだろうと言って喜び、その後相続人が実は自分であると分かった時には、妹が悲しむだろうと言って悲しむ。それは「没我」の例である(Pikulik 51)。すると遺産の話、即ちお金の話は、徳の試練(Steinmetz 54)として当事者の姉妹と彼女等への結婚申込み者たちの踏絵となっている。

そしてジークムントはこの徳の試練に敗れる。「それ(お金)は徳の試金石であり、その事で例えば『優しい姉妹』のジークムントはよろめくのであり、それは彼の恋人の妹にあたるユールヒェンが騎士領を相続したと聞いた時の事である」(Pikulik 50)。そして第三幕はジークムントの悪徳、就中ロットヒェンに対する裏切りが次第に人々の知る所となり、そしてダーミスとジーモンが

これを糾弾するという筋になる。

徳の試練に敗れ、背信の廉で糾弾される身と相成った。このジークムントの筋には悪徳は有るが、その悪徳が果たして世に悪徳と謂う程のものであるのか、そして殊更に糾弾されねばならないものであるのかについては、或いはそうかもしれないし、或いはそうでないとも言えそうである。

ジークムントがロットヒェンを裏切って、クレオンにユールヒェンを嫁に約束して呉れと迫ったことには既に触れた。しかしこれについてはクレオン父さんが殊更咎め立てしようとは思わない程のものであった。

ジークムントの画策はまた直接ユールヒェンにも及んでいる。彼は彼女に第三幕第1場で、彼女の恋人のダーミスが彼女の姉のロットヒェンの方を好きだというような告げ口をしている。しかしこれはロットヒェンが詭計で、ダーミスにはユールヒェンに対して気がなくなった様に振る舞ってくれということだったから、それをジークムントが自分の意図に沿う様に拡大解釈したと考える事も出来る。

ロットヒェンの詭計では、更に、ジークムントはユールヒェンに気があるように振る舞うとの役割を仰せつかっていたのだったが、彼はこれを本気でやっけるので、ユールヒェンに下心を見破られ「人間たちのベスト」(III/1)呼ばわりされる。ただしこの直ぐ後、彼女は「貴方のお名前を暴露しないことを…私の名誉にかけてお約束します」(同上)と言うから、事は荒立てられずに済みそうな様子であった。にも拘らずダーミスらが糾弾せんといきり立つことになるが、その際ユールヒェンは「彼は一体全体全く赦され得ないのでしょか」(III/9)と、逸るダーミスを宥めようとしたのだった。

ゲラートは悪徳を風刺して徳に至らしめる効用と並んで、徳を舞台に上げばそれを見習おうとする様になる効用も挙げている。そして後者の方に重点が置かれ、ゲラートは喜劇の登場人物のことで「私たちは正直な人々が出来るだけ数居て欲しいと密かに望んでいる」(Abhandlung 135)と述べている。正直のrechtschaffenもaufrichtig(誠実)の内で、市民社会の徳目の最たるものである。そのような有徳の士を出来る限り数多く舞台に並べ度いとは、頻度としてである。他方頻度として背徳の人々は出来る限り数少ない方が良いことにな

るが、『優しい姉妹』では更に量的にジークムントの悪徳は見方によってはその罪が罪とも思われぬ程僅かである。

笑いが無いのは悪徳が僅かであるからなのか。悪徳は風刺されると笑いを誘発するのだから、有徳の士を並べれば笑いを封じ込めることが出来る。そうした意図を作者は確かに持ってはいる。

『優しい姉妹』の初めの筋、ザクセン類型喜劇の筋では、ユールヒェンの我儘 Eigensinn が悪徳として扱われていた。この悪徳はほんの少し矯正すれば、親の強制によらない結婚を目指す進歩的姿勢として評価されることになる。しかもゲラートその人が恋愛結婚を理想として掲げていたのである(Späth 57)。理性によって矯正が可能な悪徳というのが類型喜劇のゴットシュートの・啓蒙主義的特色であった(Steinmetz 22/23)。ユールヒェンの場合心の真実に気が付かないという過ちが悪徳に当たり、その矯正は理性ではなく、むしろ感情に訴えてなされるのであるが、何れにせよ僅かな悪徳である。しかもその過程には笑いがあった。笑いにとっては、悪徳はむしろ深刻なものではなくて僅かな方が良いということにもなる。

さて、登場人物の各々は有徳の人たらんと真剣である。しかしそれでも、少なくともジークムントに笑いの種は残されている。彼もまた有徳の人として登場し、そして背信がばれてもなお有徳の人という姿勢は最後まで貫く。このこわばりは恰好の笑いの種の筈である。ところがゲラートは遣り過ぎす。既に糾弾者たちの一人をしてロットヒェンに、笑い事では終わらない事を宣言させていたのだった。

(Simon:) Nein, Mamsell, ich bin zu einem Scherze, den mir die Ehrerbietung gegen Sie untersagt, zu ernsthaft.

(ジーマン:) いいえ、お嬢様、冗談を言うのはですね、貴方に対する尊敬の念が禁じる所でありまして、冗談を言うには私は真面目過ぎるので  
す。 (III/14)

或いはこの台詞の、のぼせ上がった、狂気染みた真面目さこそが笑いの種、そ



う考えてみるのは甲斐のある事である。観客は喜劇の舞台にこれを聞く。作者も喜劇を意識しているかもしれない。しかし笑いは決して誘発されない。基本的な所では作者も一緒に真面目、或いは真剣だからである。

6

「節操」Treue か「背信」Untreue/Treubruch かは貞節・不貞の響きがあるが、『優しい姉妹』では未婚の男女の事でもあり、むしろ誠実・不誠実の問題となる。ただし所謂不貞とか浮気とかの意味を利用した箇所も見られる。「誠実さ」については Aufrichtigkeit という語で、専ら内面的な価値という点で一義的になる。

さて、クレオン父さんが殊更咎め立てしようというのではなく、ユールヒェンも事を荒立てようとはしなかったのだが、それにも拘わらず事態がジークムントにとって決定的に不利になるのは、独り言をユールヒェンとダーミスに立ち聞きされてからである。

(Siegmond allein:) Aber wo bleibt Lottchen? Hat sie gar meine Untreue erfahren?

(ジークムント、独白:) それにしてもロットヒェンは何処に行つて居るのかな。私の背信の事まで聞いたのかな。 (III/8)

ジークムントを姉が信じた儘でも不幸、真実を話しても悲惨。ユールヒェンはこれをダーミスに相談する。彼はロットヒェンに話すと言う。ダーミスが話せばそれが糾弾となり、あんな屑とは別れろということになるのは必定。しかしそこまではユールヒェンもし兼ねる、させ兼ねる。「黙っていて下さい…ひょっとして彼は根っから悪いのではないかもしれない」と。しかしダーミスはジークムントの「背信」Untreue を咎め、

(Damis:) so ist er in meinen Augen doch allemal weniger zu entschuldigen als ein Mensch, der den andern aus Hunger auf der

Straße umbringt.

(ダーミス：) 彼は私の目には、飢えて路上で他人を殺すに及ぶ奴よりも、  
全くはるかに赦し難いんです。 (III/9)

ダーミスには憤る理由はあるらしい。そもそもジークムントがユールヒェンに  
ちょっかいを出したことで実害が彼に及び兼ねなかった。しかも「これが、一  
度ならず私の家や私の財産を用立ててあげた友達のすることか」と言うが、ダー  
ミスの憤りにはそれなりの背景があることを暗示している。それにしても人殺  
し呼ばわりは、これが心の誠を徳とする感動喜劇という特殊なジャンルである  
からか、つまり主観的なものを過大視するジャンルであることによるのだろう  
か。しかし客観的には言い過ぎであろう。

ジークムントは独り言を立ち聞きされて追い込まれて行く事になるのだが、  
その独り言を呟いたのは、その前の第三幕第6場と第7場で匿名の手紙によっ  
て讒訴されて動揺したからであった。その匿名の手紙の内容は、それをロット  
ヒェンが読み上げた所によれば、

Mamsell, trauen Sie Ihrem Liebhaber, dem Herrn Siegmund, nicht.

Er ist ein Betrüger. N. N.

お嬢様、貴女の恋人ジークムントさんの事はお信じになりませんように。  
彼は詐欺師なのです。何某より。 (III/7)

匿名の手紙はその後ダーミスがジーマンと一緒に書いて出したものだとこの二  
人がそれぞれ話す。この手紙によってジークムントは動揺し、自ら墓穴を掘る。  
つまりこの手紙は、愛と友情の人たちダーミスとジーマンにとってジークムン  
ト糾弾の発端になっている。

ジークムントは、ダーミスとジーマンによって手紙で讒訴されたのだが、そ  
もそもそまで追求される程の事なのか。それなのに、小さな過ちを二人に誇  
大に言い立てられて、陥れられたと見ることは出来ないだろうか。

遺言状には遺産の受取人が実はロットヒェンとなっていたとは、その後ジーマン

モンの訂正してきたところである。そしてジーモンはダーミスの後見人である。するとこの二人がぐるになって、ロットヒェンの恋人ジークムントを陥れるべく、一芝居打ったのだらうとは見やすい道理である。つまり遺言状連絡の役目のジーモンなら、受取人はユールヒェンという虚報を流せる立場。そもそこの虚報、ジークムントの「徳の試練」としての小道具なのだから、作者の意図次第で、あるいはむしろ作者の意図と離れて、どうにでもとれそうである。作者の意図は「徳の試練」である。しかし作者の意図はどうあれ客観的には怪しさを払拭し切れない。それにどうやら作者は勘づいていて、ロットヒェンに勧導らせる。ダーミスに思惑があるのかとジーモンに訊ねて、

(Lottchen:) Will Ihr Herr Mündel etwa das Rittergut gern haben, weil es so nahe an der Stadt liegt? Nun errate ich's, warum er itzt gegen den guten Siegmund etwas verdrießlich tat.

(ロットヒェン:) 貴方の被後見人にあたるお方はひょっとしてその騎士領を手中にしたいとでもお思いなのですか。だってそれは町のすぐ近くにあるんですものね。今や私には何故彼がああ善良なジークムントに対して事を面倒にしてくれたのか、お見通しなんですよ。(III/14)

ジークムントにも善玉である可能性が、筋の展開如何によっては十分あるのだという事を、作者が漏らしている。その場合はダーミスとジーモンが悪役である。

ジーモンの方はといえば、一層怪しさが付纏っている。劇のからくりを客観的に見てみれば、ダーミスの後見人にしてクレオンの家に遺言状を取り次ぐ事情通。その彼がクレオンの娘たちの婚約に当面した話し合いに首を突っ込み、姉嬢のロットヒェンとジークムントとの婚約を潰して、自分がその座に居座る。それが意図して行われたと取られても仕方がないこと、それは作者の承知している所である。実際、ジーモンはロットヒェンにジークムントの背信を糾弾する場面で、彼の善意からの訴えに実は愛情が仄見えている事をロットヒェンに見透かされる。だから彼女の追求する所は、

(Lottchen:) Das ist ein neuer Kunstgriff. Mein Herr, Ihre List, wenn es eine ist, und sie ist es, sei verwünscht! ... Sie wollen sich an seine Stelle setzen? Ist es möglich?

(ロットヒェン:) これは新手のトリックですわね。もしも貴方。貴方の詭計は、もしそういうものが詭計といえるなら、そして詭計とはそういうものなのでもの、呪われてあれかし。… 貴方は彼の代わりに居座ろうとしてるのですか。そんな事が出来るものですか。(III/14)

この当然の嫌疑を払拭することが、ジーモンが善玉に留まる条件である。「お宅の敷居は生涯二度と跨がないとお約束したい」、つまり貴方を狙っての下心からではなくて、善意からジークムントを糾弾したのだと証明せねばならない苦しい羽目になる。

ジーモンとダーミスの「詭計」Listを正当化するのは単えに彼らの善意、あるいは「誠実さ」Aufrichtigkeitである。ジークムントの「背信」Untreueの罪はというと彼自身が言っているように、

(Siegmond allein:) Ich bin nicht untreu gewesen. Nein! Ich habe es nur sein wollen;

(ジークムント、独白:) 私は背信した事はなかった。否だ。私はそうしようと思っただけじゃないか。(III/8)

背信は、場当たりの探りを入れてみたが上手く行かず、確かに考えただけという程度に留まっている。それに較べてジーモンとダーミスの謀り事は用意周到で、しかもジークムントを陥れるという実効を伴っている。それなのにジークムントが悪玉にされ、ジーモンとダーミスが善玉とされるのは、単えに「誠実さ」の有無にかかっている。「誠実さ」によって常識が覆るのである。即ち普通なら、美人姉妹のどちらにしようかと迷うような所謂ドッペル・リーベ等は、或いはそうした迷いが財産の行方に左右されている等は、ジークムントがやった程度でおさまれば、むしろ笑って済ませる事例も多だろう。ところ

が誠実さが「心」Herzの事であり、愛と友情のセンチメンタリズムでは「心」が全てであり、そして作者がこの立場から感動喜劇の醇化を志しているとすれば、ジークムントを笑って赦すだろうような世間の常識こそが覆されねばならなかったのだろう。そして誠実と不誠実との、善意と悪意との戦いが繰り広げられるのだが、この主観と主観のぶつかり合いは真面目に真剣になればなる程、如何にも覚束ない。そしてそもそも既に見たように、涙と笑いの境界からして臆気なのである。

## 註

1

“Wann nun die ausgelassene und heftige Freude, ... nicht leicht eine ernsthaftere Gemütsbewegung verstattet; so glaube ich doch, daß jene gesetztere Freude sie verstatten werde. Und wenn ferner die Freude nicht das einzige Vergnügen ist, welches bei den Nachahmungen des gemeinen Lebens empfunden werden kann; so sage man mir doch, worinne dasjenige Lustspiel zu tadeln sei, welches sich einen solchen Inhalt erwählet, durch welchen es, außer der Freude, auch eine Art von Gemütsbewegung hervorbringen kann, welche zwar den Schein der Traurigkeit hat, an und für sich selbst aber ungemein süße ist.” (Abhandlung 119)

2

“die andere ist feiner und bescheidener, weil sie zwar ebenfalls Beifall und Vergnügen erweckt, immer aber nur einen solchen Beifall und ein solches Vergnügen, welches nicht so stark ausbricht, sondern gleichsam in dem Innersten des Herzens verschlossen bleibt.” (Abhandlung 118/119)

## 参考書目

Gellert, Christian Fürchtegott: Die zärtlichen Schwestern. Ein Lustspiel von drei Aufzügen. Hrsg. von Horst Steinmetz. Stuttgart 1988 (Reclam).

テキストに使用した。引用は第三幕第20場を III/20 と表記した。

このレクラム版は他に同時代の論文二編と編者後記を取める。

編者後記 (S. 139-158) からの引用は Nachwort 139 という様に表記した。

Gellert, Christian Fürchtegott: Gesammelte Schriften. Kritische kommentierte Ausgabe. Hrsg. von Bernd Witte. Band III Lustspiele. Berlin, New York 1988.

注釈等を参照した。

Gellert, Christian Fürchtegott: Abhandlung für das rührende Lustspiel. Übersetzt von Gotthold Ephraim Lessing. Im Anhang der Reclam-Ausgabe: Christian Fürchtegott Gellert, "Die zärtlichen Schwestern. Ein Lustspiel von drei Auszügen". Hrsg. von Horst Steinmetz. Stuttgart 1988, S. 117-137.

引用は Abhandlung 117 という様に表記した。

Gottsched, Johann Christoph: Ausgewählte Werke. Hrsg. von J. Birke und B. Birke. 16. Band, 2. Teil. Versuch einer Critischen Dichtkunst: Anderer besonderer Theil. Berlin, New York 1973.

\*

Koopmann: Drama der Aufklärung. Kommentar zu einer Epoche. München 1979.

中村元保：ドイツ市民悲劇成立の研究. 東京 1991.

Pikulik, Lothar: "Bürgerliches Trauerspiel" und Empfindsamkeit. Köln,  
Wien 1981.

Saße, Günther: Die aufgeklärte Familie. Untersuchungen zur Genese,  
Funktion und Realitätsbezogenheit des familialen Wertsystems im  
Drama der Aufklärung. Tübingen 1988.

Späth, Sibylle: Väter und Töchter oder die Lehre von der ehelichen Liebe  
in Gellerts Lustspielen. In: "Ein Lehrer der ganzen Nation". Leben  
und Werk Christian Fürchtegott Gellerts. Hrsg. von Bernd Witte.  
München 1990, S. 51-65.

Steinmetz, Horst: Die Komödie der Aufklärung. Stuttgart 1978 (1966).

## ABSTRACT

Sigmunds Laster: Zur Erwägung des Komischen  
in Gellerts Lustspiel "Die zärtlichen Schwestern"

**Masuo Kataoka**

In Gellerts rührendem Lustspiel "Die zärtlichen Schwestern" ist wohl  
der der Untreue beschuldigte Liebhaber Siegmund leicht zu entschuldigen,  
und ein solches Laster dürfte der Gottschedischen Komödientheorie nach  
mehr mit Hilfe der Vernunft korrigiert werden, um die Zuschauer durch  
das satirische Lachen zur Erbauung zu bringen.

Aber im Ablauf der Handlung wird der lasterhafte Siegmund von der  
tugendhaften Freundesgemeinschaft entfernt, und nach Gellerts heimlichem

Wunsch, daß die rechtschaffnen Leute so häufig als möglich sein möchten, wird auf der Bühne die moralische Reinigung durchgeführt, wobei das Lachen überhaupt verschwindet. In seiner "Abhandlung für das rührende Lustspiel" wies Gellert auf die Kritik hin, es gebe (unter den sogenannten rührenden Komödien sehr viel trockne, frostige und abgeschmackte). Angesichts der Problematik stillen Lachens beruft sich Gellert bei der Grenzziehung oder -erweiterung der Komödie auf (einen solchen Beifall und ein solches Vergnügen, welches ... in dem Innersten des Herzens verschlossen bleibt). In den letzten Szenen der "Zärtlichen Schwestern" wird dann gefragt, ob die Zuschauer an dem weinenden Lottchen (Beifall und Vergnügen) nicht finden, oder ob das augenblicklich vom Liebesglück verlassene Lottchen in der Wahrheit des Herzens nicht glücklich ist.

Auf der Suche nach der Wahrheit des Herzens handelt es sich bei Simon und Damis um die Aufrichtigkeit. Wie ist es aber in der dem Herzen gegenüberzustellenden irdisch-weltlichen Gesellschaft? Hier schließt sich eine andere Überlegung an, daß die beiden Anklagenden eben ihrer objektiv erfolgreicherer verleumderischen List wegen umgekehrterweise eigentliche Schurken werden könnten, wenn der Autor Gellert selbst nicht auf die Tugend der empfindsam-selbstlosen Aufrichtigkeit beharrte.

Was das Verhältnis des Lasterhaften zum Lächerlichen anbetrifft, das kontrolliert in der ersten Julchen-Handlung einer satirischen Komödie der Magister. Zur Erwägung des Komischen würde die Annahme der Behauptung beitragen, daß eine lächerliche Rolle wie die des Magisters auch in der letzten Siegmund-Handlung der Ruhrkomödie beim Vater Cleon gesucht werden könnte, wenn das Laster Siegmunds geduldet worden wäre.